

# アフリカというものへの先入観 — 昆虫と先住民から学ぶ

WCS 自然環境保全研究員

西原智昭  
にしはら ともあき

## コンゴ盆地・熱帯林地域の 過ごしやすさ

日本では猛暑が続く。年々熱中症による死者も増加している。多くの日本人に「アフリカの方がもっと暑いから、これくらい何ともないでしょ」と言われるたびに、違和感を覚える。根拠のない先入観だからだ。実はほかでこれまで30年本拠を置いてきたアフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域の方が日本よりずっと過ごしやすい。赤道直下であっても熱帯林のなかであれば最高気温は25度程度で熱帯夜もない。エアコンも扇風機も不要である。

アフリカというと開けた草原地帯があり、直射日光の当たるその灼熱地獄のような場所にライオンやキリン、ゾウがいる、というイメージが強い。アフリカといっても広く、その中央部にはコンゴ盆地という熱帯林地域があるのだ。そこは、よく知られているゴリラやチンパンジーの生息地でもある。アフリカ大陸には多種多様な自然環境・野生生物だけでなく、数多くの民族や言語、そして国家がある。に

もかわならず、日本人は学校でアフリカのことをほとんど学ばないためか、まるで一国であるような見方をするのもいまだに少なくない。

## 発想の転換で森になじむ

そうした思い込みは多岐にわたる。「アフリカのジャングルなんて、虫がうじゃうじゃいて、熱帯病とか伝染病とか大変でしょう」ともよく言われる。しかし、現実には奥地の森であればあるほど、川の水はきれいで空気も澄んでいる。人がほとんどおらず人為的な汚染がないからである。多くの熱帯病は人口密集地で感染するのだ。人から人へ伝染するからである。人の少ない原生林やその周辺地域では病原菌を媒介する虫はいても、そもそも病



時の調べ  
Essay

原菌がないので伝染しようがないのだ。その証拠に、奥地での生活の長かったばかり自身も30年の年月を経ても、大きな病にかかったことはない。

確かに昆虫の種類は多く、ハチやハエ、ブユ、蚊の類には、ほくもこれまでにどれだけ刺されてきたことであろうか。ただ、病気にはまずかからないと確信しているので、刺されて痛いあるいはかゆいのを我慢すればよいだけのことである。そうはいっても、うっかり1匹でも殺そうものなら、その臭いを嗅ぎつけて何十何百と押し寄せるアフリカミツバチやハリナシバチの大群は心地よいものではない。「なんで、オレにそんなにたかるんだ！畜生め！」と騒ぐ人間も後を絶たない。

しかしそこでふと考える。こうした昆虫は人間という動物の汗などの体液をなめに来ているだけなんだ、ただ人間側があらがおうとするので、その対抗措置で攻めて来るのだ、すると悪いのは彼らではない、もともとその原生の森にわれら人間が入ったせいなのだ、ならば昆虫からの洗礼を受けるのも当然

だと。そんなに虫が嫌ならばこちらが出ていけばよだけの話である。虫を悪者扱いする偏見は捨てなくてはならない。そう発想の転換をすると、不思議と気持ちは落ち着き森のなかになじんでいく。

### 自殺や殺人のない 先住民ピグミーの社会

最後に当地の森に強く依拠してきた先住民ピグミーについて述べたい。彼らの生活は物資に恵まれていない。さらにこうした昆虫の行き交う森のなかにいるとなれば、われわれ都市文明人が享受している便利で快適な生活環境ではない。近代医療も薬品も身近にない。彼らの集落を見ると、50歳くらいの寿命でぼっくり死ぬというケースが多い。

それにもまして重大な点を指摘したい。これまでピグミーの社会では自殺が存在しないのである。実は、ついこの前まで殺人も皆無であった。世界のなかでも自殺率トップクラスの日本とは大違いである。日本では、自殺者が多く、親子間、友人間、無差別など尋常でない殺人事件が毎日のようにあると説明すると、彼らは決して納得しない。

彼らは何万年あるいはそれ以上にわたって、どのように自殺や殺人のない社会を築き上げてきたのであるろうか。アフリカのコンゴ盆地の熱帯林地域といえば、人類発祥の地でもある。その地に長年依拠して生活をしてきた、この先住民ピグミーから、人類が本来持っている「身体の健全さ」だけでなく「心の健全さ」についても、われわれは学ぶものが多いはずである。



**略歴**  
1989年から約30年、アフリカ・コンゴ盆地熱帯林地域にて、野生生物の研究調査、国立公園管理、熱帯林保全に従事。国際保全NGOであるWCS (Wildlife Conservation Society) の自然環境保全研究員。NPO法人アフリカ日本協議会理事。京都大学で人類学を専攻。理学博士。著書に「コンゴ共和国「マルミ」ゾウとホテルの行き交う森から」(現代書館)。